
SERENDIPITY ～ ガラスの靴を履いたお姫様の恋物語 ～

佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SERENDIPITY〜ガラスの靴を履いたお姫様の恋物語〜

【Nコード】

N3842M

【作者名】

佳

【あらすじ】

人気俳優の花岡輝は、偶然乗り込んだ電車で、一人の女性に一目ぼれする。連絡先も聞けぬまま、一人片思いしていたところ、ひょんなことから彼女と会えることに。しかし、その彼女、実は。恋に奥手な彼と、恋が苦手な彼女。彼の恋の行方は如何に・・・？

始まりは、満員電車にて

シンデレラは、一人お城の舞踏会に行った時、

完璧なメイクに、完璧な髪型、そして完璧なドレスを纏っていた。

でも、

靴だけは、脆くて脱げ易いガラスの靴だった。

なぜそれだけ、完璧じゃなかったのか。

その答えが、この二人の出会いに隠れていたりするかもしれません。

ガラスの靴を履いて王子様と出会った理由、知りたくありませんか？

継母と義理の姉達にこき使われていたシンデレラ。

ある日、お城の舞踏大会に招かれるものの、

彼女はドレスも靴も宝石も無く、彼女達と一緒に行く事は出来なかった。

それでも舞踏大会に行きたかったシンデレラの前に現れたのは、魔法使い。

魔法使いは、シンデレラに魔法を掛け、彼女を美しい姫に、変身させたのだった。

「これ、駄目ですね。動かないですよ」

「うそ……。ヤバイよ。後30分以内に到着しなきゃいけないのに」

車、車、車の列。

都心の道路は、朝の通勤時間帯、空から見れば、まるでそれは蟻の行列のようだった。

そして彼らは、その行列の中にいた。

後部座席の男がしきりに腕時計を見る。

何度見たって、時間の進むペースは同じなのにもかかわらず。

「何でこういう時に寝坊しちゃったんだろう」

男が頭を抱え込む。

それで渋滞が解消すれば、簡単な話だが。

「・・・仕方ないですね。こうなったら電車で向かってください」

運転席に座る男が溜息と共に言うと、助手席に置いてある鞆から何かを取り出した。

「サングラスです。これでまあ、何とか現場まで行けると思います。

中央線の神田駅で降りてくださいね。こっちから現場に連絡しておきますから」

黒い眼鏡ケースが手渡された。

彼は急いで中身を取り出すと、それを自分の鞆の中にしまった。

「ありがとう。それじゃ現場で」

彼はドアを開けた途端、降り立ったアスファルトを蹴り、近くの地

下鉄へと走り出した。

平日の朝8時、殺人的な混雑を誇る中央線に、新宿駅から乗り込むのは、至難の業である。

特に背が低ければ低いほど、その中での生き残りは困難を極める。

しかし、そんな中、人の海に果敢に飛び込む勇者たちの中に、小さな彼女はいた。

「・・・ふう」

人の波に飲み込まれたかのように電車に押し込まれた後、

彼女は自分の周りを囲む人の中、背伸びをして上空の空気を吸う。

自由に身動きができない中、新鮮な空気を吸うには、

これ以外の方法は、座席前での立ち位置を惜しくも逃し、

座席の端にある手摺り近くにしか行けなかった以上、あり得ない。

身長152cmの彼女は、すっかり外し忘れていたスーツの襟に付けたピンバッジの無事を確かめながら、

目的地への早期到着を祈っていた。

しかし、こういう時に限って電車の進みは遅いものである。

特に通勤・通学時間は、電車が遅れるのが常識、ともいえる。

彼女は背伸びをする足に疲労を既に感じていた。

鼻の上にずり落ちて来ていた眼鏡を直そうとするが、

手が周囲の人の体とに挟まって拳がらない。

一度体勢を立て直そうと下を向いた時、彼女の視線は、自分の斜め前に立つ女性を捉えた。

その女性は座席の前に立ち、つり革に掴まっていた。

特に気にも留めず、彼女はもう一度背伸びをしようとして上を向いたが、一瞬妙な違和感を覚えた。

何が変わったのか、確認する為にもう一度その女性の方に目を遣る。

どうやら、様子がおかしい。

その女性は真つ赤な顔をして、体を震わせているようだった。

時々目をつぶり、体を動かそうとしているが、混雑故に、思うように動けないようである。

体調が悪いのだろうか、声をかけようと、接近を試みる。

体をわずかな隙間の中で捻じ曲げて近づけると、彼女のおかしい様子の原因が分かった。

(・・・この男?!)

女性の臀部に、彼女の背後に立つ男の手があった。

明らかにそれは、故意に彼女の臀部に置かれ、触れているのである。

(・・・許せない)

怒りのボルテージが一気に上昇する。

正義感が人一倍強い彼女は、無理やり手を挙げ、

ついでに眼鏡もあげ直し、体を思い切り捻じ曲げて、

周囲の睨む視線も気にせず、その男の隣に入り込んだ。

男は、特に気に留める様子も無く、その手を女性のスカート下に入れようとしていた時だった。

「ちょっと、今、彼女のスカートに手を入れようとしていましたね」

彼女はその男の手首を掴み、捻り上げた。

男は突然の事に、目を見開いていた。

「貴方の行為は犯罪ですよ。一緒に次の駅で降りなさい。」

ほら、あなたも被害者だから、一緒に降りてください」

丁度電車は信濃町の駅を通り過ぎ、「次は、四ツ谷」というアナウンスが聞こえてきた。

周囲がざわつき始める。

彼女は小さいながらも精一杯の力でその男の手を引き、ドア付近へ向かおうとした。

電車が四ツ谷駅に到着した。

プシューという音と共に、ドアが一斉に開く。

たくさんの人が、ドアへと流れていった。

彼女は男の手を離さないよう、しっかり掴んだまま、駅のホームに降り立った。

混雑からの解放故か、一瞬だけふうと気が抜ける。

その時。

「・・・はなせ！」

そう聞こえた瞬間、何かの衝突音と共に顔に大きな衝撃を感じた。

一瞬何が起こったのか分からないまま、彼女はそのまま後ろに倒れこんだ。

「・・・！？」

男は、彼女の顔を空いていた方の手で殴り、逃走を図ったのだ。

周りが騒然とする。

彼女は混乱したが、よろけながら立ち上がり、大声で叫ぶ。

「待ちなさい！誰か！その男を捕まえて！」

彼女の叫び声と同時に、誰かの声が聞こえた。

「おい！待て！」

背の高い誰かが、男の後を追いかけていた。

その人は、人ごみを掻き分け、その男に覆い被さるように後ろからぶつかって行った。

男はよろけてその場に倒れる。

彼女はようやく落ち着きを取り戻し、被害者の女性と二人の下へと走った。

「大丈夫ですか？」

誰かが呼んだのだろう、何人かの駅員が駆け寄り、

その男を制止しつつ、その一人が彼女の右頬にある痣を見て、尋ねた。

「ええ、私は平気です。とにかく警察を呼んでください」

彼らはとりあえず駅務室へと向かう事になった。

秋霜烈日な貴女と

「はい。すみません。そういう事なので、遅刻します。」

「・・・ええ。・・・それでは、失礼します」

彼女は駅務室のドア付近にいた。携帯を切り、駅員に渡された食品用の冷却剤を頬に当てた。

「・・・いたあ・・・」

幸い、口の中は切れていなかった。

しかし右頬には大きな青い円がしっかりと出来上がっていた。

「・・・大丈夫・・・ですか？」

恐る恐る、椅子に座っていた被害者の女性が尋ねてきた。

「え？ああ、気にしないで。これ、勲章ってやつじゃない？」

彼女は笑って答えた。

女性は安心したように、小さなため息をついていた。

男は別室で先ほど到着した警察から事情を聞かれている様だった。

彼らは男が連行された後の事情聴取の為、しばらく駅務室で待機することになったのである。

隣を見ると、先ほど男を追いかけた人が、

椅子に座りながらもそわそわした様子で仕切りに腕時計を見ているが、

携帯でどこかに電話した様子はなかった。

「・・・あなた、どこかに向かう途中じゃないのですか？」

もう季節は秋なのに、大きなサングラスをかけている。

髪はぼさぼさしているが、肩より少し短くて、柔らかそうだった。

Tシャツの上にジャケット一枚、ジーンズというラフな格好をしている。

肌は色白く、線の細い感じで、一瞬女性のように見えたが、

背の高さや肩幅から、男性のようだった。

「え？あ、ああ。そうなんです、携帯を忘れてしまい・・・」

口からは意外と低めの渋い声が聞こえてきた。

「それじゃ、私の使います？」

「い、いえ。それが、先方の電話番号も携帯に入っているものだから、分からないんですよ」

彼が苦笑いをする・・・ように見えた。

目が見えないため、口で判断するしかないが。

「そう。それじゃ、仕方ないですね」

彼女は携帯を鞆にしまい、隣に座った。

すると、向かいに座っていた女性が、再び恐る恐る、しかし今度は彼に尋ねた。

「あの・・・もしかして・・・花岡輝さんじゃありませんか？」

「え？2人とも知り合いですか？」

彼女が素っ頓狂な声をあげる。

「・・・やっぱり分かりますか。サングラスだけじゃ」

男が参ったな、といわんばかりの表情をした・・・ように見えた。

「似てるな、と思ってたんですが・・・。信じられない！私、ファンなんです」

女性が嬉しそうに言う。

彼はサングラスを取り、鞆からメガネケースを取り出し、そこにしまった。

「・・・あの、知り合いなんですか？」

彼女は女性に聞いた。

彼女は驚いたように応えた。

「知らないんですか？あの花岡さんですよ？」

「……あの『って……。私、知り合いに花岡という人は……」

彼女は馬鹿にされたような気がして、少しだけム、とした。

「彼は今超人気の俳優ですよ。」

今花岡さんが主演されている映画が歴代の興行記録を塗り替えたつて、

連日テレビでも報じられているじゃないですか。

花岡さんは二枚目で、高学歴だけど、それを鼻にかけず、性格がとっても優しくて、

それもひょうきんな面もあって、本当に素敵なお方なんです！

最近は鈴木派と花岡派で別れていて、私はどっちかといったら花岡派なんです。

でも、色黒でワイルドな鈴木さんも捨てがたいですよー！」

選挙の街頭演説でもしたいのか、と彼女は突っ込みたくなった。

「・・・テレビはほとんど見ないので、存じ上げません」

彼女はバツが悪そうに、花岡、と呼ばれた男に軽く頭を下げた。

彼は少し驚いたようだったが、微笑んで彼女に言った。

「いえ。お気になさらずに。」

他人ですから、知らないで当たり前です。僕は偶然他の人より知られているっただけですから」

「・・・すみません、被害者の女性の方だけ、こちらに来て頂けますか」

部屋のドアが開き、警察官が入ってきた。

女性は急いで鞆を持ち、出入り口へと向かう。

「花岡さん、頑張ってくださいね。」

応援してますから！御二人とも、ありがとうございました」

そう言って彼女は部屋を出て行った。

「あの・・・」

「はい？」

少しの沈黙の後、花岡が彼女に話し掛けてきた。

「貴方、勇気ありますね。男性でも怖いのに、女性なら、もっと怖いでしょうに」

「いえ。私は怖くありませんよ。ただ、許せないだけです。

目の前で犯罪が行われているのに、私は怒りを感じた、だから捕まえただけに過ぎません」

「・・・そうですか」

再び、沈黙が落とされる。

そしてまた、花岡がその沈黙を破った。

「その胸のピンバッジ、格好良いですね。会社のか何かですか？」

彼が彼女のピンバッジを見て言った。

特に気にかかった訳でもなかったが、他の話題が見付からなかったからだった。

「これですか？・・・まあ、そんなものです」

彼女は眼鏡の紺色のフレームをくい、と上げ、自分の胸のピンパッジを見つめた。

「・・・秋霜烈日といえます」

「え？しゅう・・・そう・・・？」

「『しゅうそうれつじつ』です。」

秋に降る霜や、夏の激しい日差しのように、仕事に対して厳かであること。

当たり前のように、難しいです。

私の『会社』は、『社員』にそうあるように、このバッジをつけさせるんです」

彼女は、何かを考え込むかのようにそのバッジを見入っていた。

彼はその様子をただ、黙って見ていた。

「・・・すみません、女性の方、来ていただけますか？」

先ほどの警察官が再び部屋に来た。

彼女は立ち上がり、彼に向かって行った。

「逮捕に協力してくださってありがとうございます。」

貴方無しではあの人を捕まえる事は出来なかったと思います。それでは」

彼女は彼に微笑みかけ、颯爽とその場を立ち去って行った。

「あ・・・名前、聞いてない・・・」

彼は一人残された部屋で、ぽつりとそう呟いた。

幸せの鼻歌、衝撃の真実バージョンで

彼女が会場に到着すると、

皆が彼女に釘付けになった。

「こんな美しいお姫様は、どこから来たのだろうか」

その噂は、王子の耳にも入る事に。

でも、誰もそれが、自分達と世界が違う人だとは気がつかなかった。
。

彼はパトカーの後部座席に座っていた。

「あ、あそのこ交差点を右に曲がってください」

「了解しました」

数分の事情聴取の後、彼はパトカーで撮影現場まで送られていた。

「あの……。遅刻しておられますが……。大丈夫ですか？」

助手席の警官が尋ねてきた。

「ああ。心配しないで。しょうがないことだったんだから」

彼は満面の笑みで答えた。

それを見た警官は安心したように呟いた。

「よかった……。」

ところで、花岡さん、先ほどから歌われている歌は、何の歌ですか？」

「え？僕、歌なんか歌ってる？」

「ええ、パトカーに乗った時からずっと鼻歌を……。」

彼には全くの自覚がなかったようだ。

驚いたように自分の口に手を当てる。

しかし、直ぐにその手を離し、にこり、と笑いかけた。

警察官がその笑顔を見て、同性ではあるがどきりとしてしまったの

は言つまでもない。

「僕、どうやら嬉しい事があると、無意識に鼻歌を歌う癖があるそうなんです。」

友人によく言われます」

「嬉しい事？」

その警察官が怪訝そうな表情を見せる。

無理も無い。

先ほどまで痴漢の事件で関係者として事情聴取されていたのだから。

「ええ、本当、素敵だったな・・・」

彼はうつとりしたように、窓の外を眺め、再び鼻歌を歌いだした。

「花岡さん！どうされたんですか？」

パトカーで町の外れにある空き地に着くと、

彼の到着を待ちわびていた数名が駆け寄ってきた。

「花岡さんは、電車内での痴漢の逮捕に協力されたため、遅くなりました。」

逮捕の御協力に、警察からも感謝いたします」

一緒にいた警察官が、近くの人にそう釈明した。

「え？そうなんですか。いやあ。参りましたよ。」

花岡さんのマネージャーは道路が混雑しているから

花岡さんは電車で向かってるっていうのに、中々来られないし。携帯は留守電だし」

髭を生やした小太りの男が笑った。

「監督。すみませんでした」

彼は頭を下げた。

その男は、はは、と軽快に笑った。

「何、そういう事なら謝る必要は無い。

さ、君のシーンの撮影に取り掛かろう。

今は鈴木君のシーンを撮影しているから、その間に衣装とメイク、済ませちゃって」

彼らは小走りで自らの持ち場へと戻って行った。

「・・・よう、輝。お前、痴漢捕まえて格好良かったんだって？」

「勇哉か。撮影は？」

「今終わった。やっと休憩だよ、休憩」

台本の最終チェックをしていると、控え場所の簡易テントに鈴木が

訪れてきた。

「で？逮捕の協力はどうでしたか？花岡さん」

鈴木が茶化すように彼の肩の上に手を乗せる。

「いや、別に……。ただ……。」

「……。ただ、何だ？」

「ううん。何でもないよ」

彼は花岡が座っていた椅子の前にあるテーブルに腰掛けた。

「ったく。ちよつと愚痴言わせろよ。」

お前が来ないし、おまけに連絡はつかないし、現場は大変だったんだ。

監督は怒鳴るから雰囲気悪くて。今夜おこれよ」

鈴木が隣の椅子に座り、そばにあったコーヒーを勝手に飲み干す。

「あはは。参ったな。でも、連絡つかないのはいつもの事でしょう？

僕、携帯あんまり見ないし」

彼は笑いながら台本を閉じた。

「ったく、それでも持つてるなら出るよな？」

「あ、実は・・・」

花岡が済まなそうな顔で舌を小さく出す。

「お前まさか・・・」

「忘れちゃったんだ」

がつくりとうな垂れるような姿勢で、鈴木は頭を下げた。

「お前は～～！！携帯電話を不携帯でどうするんだ？！」

「えへへ・・・。だって・・・」

「だってじゃねえ！今度忘れたら承知しねえぞ？」

鈴木はポケットからタバコを取り出し、ライターで火を付けた。

そして口にくわえ、思い切り息を吸う。

「・・・ところで、お前、熟語得意だったよな」

くゆる煙に目がかすむ。

同じく俳優の鈴木勇哉は、花岡と高校と大学が同じだった。

高校では挨拶を交わす程度の仲でしかなかったが、

大学で同じ演劇サークルに入り、

更には就職という道を蹴り、奇遇にも同じ世界に挑んだ仲間として、一番の仲が良い、いわば親友同士であつた。

「あ？まあ、得意というか、人よりは知ってるよ」

鈴木はポケット灰皿を胸ポケットから取り出した。

「・・・『秋霜烈日』って知ってるか？」

「しゅうそう・・・ああ。知ってるよ」

彼は身を乗り出した。

鈴木が怪訝そうな顔で花岡を見る。

「・・・でも何で突然そんな事を聞くんだ？

・・・大体お前がこういう風に、突然脈絡の無い事を聞くのって・・・。

さてはお前・・・」

「い、いいじゃん、別に」

にやり、と鈴木は整った唇の上に笑いを載せた。

「顔に書いてあるぞ」。好きな女の子がそう言ってました、てな」

「ち、違う！す、好きななんかじゃなくて、気になるだけ・・・」

あ、と彼は慌てて口を両手で抑えたが、時は既に遅し。

こんがりと日焼けした長い腕が、花岡の肩に乗せられた。

「いつも本当に正直で、お兄さんは困るよ、全く。さ、話してご覧なさい」

彼は顔を真っ赤にして、俯いた。

「・・・彼女が胸に付けたピンバッジを見ながら、その意味だ、と言ってたんだ」

「・・・え？」

鈴木が驚いたような顔をする。

「お前、それがどういう意味か、分かるか？」

「・・・え？秋に降る霜のように、夏の激しい日差しのように、厳かである・・・」

とか言ってたけど？」

はあ、と大きなため息を付いて、鈴木は言った。

「もう1つ、他の意味がある。それはな・・・」

ぼそり、と鈴木が呟いた。

そのテントが崩れるほどに大きな声が撮影現場に響き渡り、
監督が怒鳴り込んで来たのは、間もなくの事であった。

運命の噛み合わせ。

「で、何でその女性を好きになったんだ？」

夜は更け、月の光が一番輝きを増す頃、二人は花岡のマンションの部屋にいた。

「うーん。別に、顔が好みとか、そういう訳じゃないんだよね・・・」。

化粧っけは無いし、髪も僕と同じくらいの長さなんだ」

彼女の容姿を話している内に口が緩んできている花岡を尻目に、

鈴木は左手で持っていた缶ビールを口につけ、その中のビールを喉に流し込む。

「まあ、お前は面食いじゃないのは知ってるよ。昔からそうだしな。ただ、出会ったばかりの人を好きになるなんて、お前にしては珍しいな、て思ってたさ」

花岡の手には、缶ボトルから注いだカクテルの入ったグラスが握られていた。

濃いオレンジ色に染まるグラスをじっと見つめる。

「何て言うのかな……。衝撃、だったんだよ。彼女の……。」

痴漢を捕まえた時の彼女の顔。

そして電車から降りようとした時、手を離さないよう必死になっていた時の姿。

本当は自分も、痴漢の斜め後ろに立っていたから、痴漢の行為には、薄々気が付いていた。

でも、声をかける事は、なお躊躇われた。

自分の心の中であれこれ言い訳して、捕まえる勇気がなかった。

それなのに、あの人は、あの小さな体を捻じ曲げてでも、目の前の悪に、立ち向かっていた。

それは、彼に眩暈に似た何かを、感じさせた。

いや、何か硬いもので殴られたような衝撃、みたいなものだったかもしれない。

でも、どうやってこれを言葉にすれば良いのか、彼にはその術を見付ける事はできなかった。

そして、心臓が飛び跳ねる音。

自分でもこの感覚には経験がある。

これは、『恋』だ。

「また、会えば分かるよ。彼女の良さは」

彼は自然に生まれてくる笑いを隠すように、グラスを顔の前で傾け、その中身を飲み干した。

「・・・お前、相変わらず恋愛に関しては偏差値低いなあ」

ビール缶をテーブルに置かれ、鈴木の手がおつまみの柿ピーへと伸ばされた。

「名前すら知らない人間に、どうも一回会って言うんだよ？」

「・・・あ」

今度は、その手があたりめへと伸びる。

「それに、彼女『秋霜烈日』なんだろう？」

どう考えても、俺たちや周りに縁があるような人間じゃないよな。

もう絶望的だな。少しは勉強しろよな。

つたく、今まで俺がどれだけ女の子との関係を取り持ってやったんだよ・・・。

それなのにいつも・・・」

マヨネーズがたっぷりついたそれは、鈴木の間へと運ばれた。

「・・・あ~~~~~!!!!!!」

花岡は空っぽになったグラスをテーブルに乱暴に置いた後、額をテーブルに叩きつけた。

「おい、ビールこぼれたじゃねえか。あ、それに柿ピーのカスが・・・」

鈴木が柿ピーカスを足で部屋の隅に蹴り寄せた事は、

その数日後、彼が部屋の掃除をする時に初めて気がつくのだった。

朝7時。

窓に吊るされた青色のカーテンの隙間から、

東の空から起き出した太陽の眩しさを目を覚ます。

・・・全く、付いてなさ過ぎる。

目を覚ました瞬間、昨日の記憶と自分の不甲斐無さを思い出し、

思わず呆れ、大きく溜息を付いてしまう。

ああいう女性を、探していたんだ。

自分の周りの同業者にはいない、ああいう、女性。

それなのに、それなのに・・・。

拳句の果てには勇哉に怒られる始末。

やれ、名前ぐらい聞け、やれ、それだからいつまでたっても彼女が
できない、やら。

ブー、ブー。

枕元に目覚まし代わりに置いていた携帯電話のバイブレーションが部屋中に響く。

無視しようと思えばするが、そのしぶとさに、彼はとうとう根を上げた。

「・・・もしもし？」

寝起き特有のゆっくりした低い声で、彼は答えた。

しかも今日はそこに不機嫌という要素が絡まり、余計に感じが悪い聞こえた。

昨日、鈴木と自棄酒をして、朝の3時ごろまで飲み続けたのである。

それもこれも、あの痴漢のせいだ。

あいつがあんな事しなければ、僕は彼女に会わずに済んで、こんな気持ちにならずに・・・。

ああ、でも、出会えたことを後悔したくもないような・・・。

微妙な気持ちと思い出したくない昨日の記憶が蘇ってきて、彼はかなりイライラしていた。

「もしもし、花岡さん。僕です。今日の午後の撮影はキャンセルになりました」

朝7時、それはマネージャーからの電話だった。

「・・・何で？」

不機嫌さがますます加速する。

「東京地検から電話がありまして、昨日の痴漢の件で任意の取調べがあるみたいです。」

ですから、そちらの方に行って下さい。昼頃マンションにお迎えにあがりますから」

「・・・え？」

眠気が一気に吹っ飛んでいく。

「それ、誰からの電話でしたか？」

「えーと、女性だったと思います。確か・・・って、花岡さん？もしも？もしもし？」

彼は先ほどまでベッドで丸まっていた人間とは思えないほどに急いで起き上がり、

支度を始めた。

念入りに顔を洗い、タンスの奥にしまっていた、

特別の時にしか着ないスーツを取り出し、

そして9時頃、彼は足早に近所の美容室へと走って行った。

「・・・花岡さん、地検に行くのに、どうしてそんなにしっかりした格好を？」

それも髪型も綺麗にされているみたいですが・・・」

マネージャーが、メガネを片手で直しながら、当然の質問をする。

隣で新品の黒いスーツを着こなした秀麗な青年が答えた。

「当たり前じゃないですか！検察庁に行くんですから！」

「・・・でも、取調べだし、それに花岡さんはただの目撃者ですから・・・。」

普段もこつこついう風にしてくれれば良いのに・・・」

最後のほうはマネージャーの愚痴で終わっていたが、彼は特に気にすることも無く、

鼻歌を歌いながら、目的地へと向かっていた。

「お待たせしました。花岡さん」

通された部屋で暫く待っていると、待ち望んでいた声が聞こえてきた。

振り向くと、そこには顔に大きなガーゼを張った、黒のパンツスーツの女性の姿があった。

「先日はお世話になりました」

そう彼女は言う、机の上にネームプレートを置き、椅子に座った。

隣には、もう一人、彼女より比較的大柄の中年女性が座っていた。

「自己紹介が遅れました。

私は検事の川上飛鳥です。こちらは検察事務官の田邊さんです。

よろしくお願いします」

パソコンを前にした大柄な女性が頭を下げる。

彼もそれに応じて頭を下げた。

紺色のフレームに囲まれた眼鏡の奥に潜む瞳に、彼女の強さを再び感じる。

「いえ、こちらこそ。まさか、貴女が検事さんだなんて・・・」

「すみません。あのときちゃんと申し上げなくて」

彼女の胸に、あの時見たピンバッジが光る。

中央部の円を囲むように突き刺さる霜。

『秋霜烈日』と呼ばれるそれは、検察官の象徴をも意味する。

そう、鈴木が教えてくれた。

彼はもう一度、あの時彼女が言った言葉を思い出した。

「秋霜烈日、まさにその通りですね」

「はい？」

何かの書類に目を通していた顔を、彼女が上げた。

「いえ、僕はあまり検察官のお仕事は詳しくありません。

しかし、川上さんを見ると、秋霜烈日の意味を実感します」

「・・・光栄です」

彼女はにこりともせず、自分の前にある書類を再び見るために視線を落とした。

彼はすこしそわそわしながら、もう一度彼女に問いを投げか掛ける。

「それで、今日は何の・・・？」

思わぬ再会の嬉しさで顔が緩みそうになるが、

仕事をする彼女の凜とした様子に、彼も背中を叩かれたような気がした。

背はかなり低いはず。

それなのに、どうしてこんなに大きく見えるんだろう、彼は不思議に感じた。

「説明が遅れました。

先日の痴漢の事件、逮捕に協力をしてくださったあなたの証言を調書に取っておき、

公判で証拠として提出させていただきたいのです。

その為、多忙だと思いますが、ご協力を、と思ひまして」

短めの髪は、彼と同じ位、もしくは彼より短いだろうか。

しかし、前髪の長さは、彼女のほうが勝っていた。

「いえいえ！いつでも大丈夫です。俳優なんて仕事は、そんな忙しいものでは・・・」

こんな台詞、マネージャーが聞いたら怒られるな、そう彼は思った。

「それじゃ、始めますね。では一応確認ということで、お名前は・・・」

かちゃかちゃ、とキーボードが2度叩かれる音が聞こえた。

「・・・以上です。ありがとうございました」

気がつけば、既に夕方の5時になっていた。

「恐らくこれで貴方はもう私達に会わなくて済みますよ」

彼女がふふ、と笑い、何かを書き取っていた。

少し冷えた、しかしどこか寂しそうな笑い声だった。

「何で、そんな事をおっしゃるのですか？」

自分の名を署名し、押印し終わって、彼女にその調書を返す。

「はい？」

彼女が顔を上げた。

隣でパソコンを打っていた事務官も驚いたように、彼を見た。

そこには、冷静というものと、困惑が入り混じったものがあつた。

「・・・僕はいつだって協力します。

川上さんに呼び出されれば、いつでも、仕事を放り投げてでも、協力しますから」

きょとん、とした様子で彼女は彼を見つめていた。

しかし、しばらくすると、彼女は少し表情を緩めて、言った。

「・・・花岡さん、貴方、面白い方ですね。

確かにあの女性が言っていたように、ひょうきんな所もあるのかしら」

「いや、ふざけてなんていません！」

彼は必死になり、自らのこぶしを振り上げて叫ぶように言った。

一方、彼女は冷静なまま、椅子に座り直した。

「普通の人はね、こういう事、嫌がられるんです。

時間は掛かるし、何のメリットにもならない。

だから、こう言えば、安心するかな、と思ひましてね」

「何を言ってるんですか！貴方の仕事は凄いものですよ！

罪を罰する権力を任されているんでしょ？

そんな方に協力を要請されて、むしろ喜ぶべきですよ！」

彼女は呆気に取られたように、彼を見つめていたが、次第にその表情に笑顔が咲いた。

「そう言ってくださると、私たちも勇気付けられます。ね、田邊さん」

「ええ。人気俳優っていばってたり性格が悪いと思っていましたけど、違うんですね」

中年の女性が、嬉しそうに言った。

「あら、人気だって知っていらしたのですか？」

意外だ、といわんばかりの表情で、田邊の方を見る。

「ええ。娘が大ファンでしてね。

部屋中彼のポスター一杯で、掃除する度に会っていますから。

川上さんぐらいですよ。

花岡輝さんを知らなかったのは」

ははは、と部屋に笑いが響いた。

田邊と呼ばれた女性はパソコンの電源を切る準備をしていた。

「この事件の日、出勤された後、川上さん、私に聞いたんですよ。

『花岡輝って誰?』てね。

ここの支部の方、皆で驚いてしまつて。

私、見ましたよ、映画。凄い感動しちゃった。あれ、上演延長なんですよ?」

「ええ。お蔭様で。ありがとうございます」

彼は軽く会釈した。

「あら、私も映画ぐらい見ますよ。ただ、最近は忙しかったから見ただけです」

彼女が拗ねたように呟く。

その様子がまるで子供のようで、可愛らしく見えた。

成功は失敗の積み重ね、・・・のはず。

「川上さん」

仕事帰り、二人は駅まで一緒に帰る事が多かった。

「何ですか？」

「川上さんって、彼氏いる？」

「・・・何ですか、突然」

明らかに狼狽した様子の彼女に、田邊が笑った。

「やだ、そんなに慌てなくても」

「あ、慌ててなんか」

「川上さんって、27歳だっけ？」

秋も中盤。

太陽は既に西の空に沈みかけている。

行き交う人は、足早に家路を急ぐ。

「そうですけど」

彼女は常に冷静沈着だった。

「ううん。ただね、今日の花岡さんも27歳で同じ年だし、

結構ああいう感じの人とか、お似合いだなって思って」

田邊が、悪戯っ子のような笑いを浮かべる。

「何をおっしゃりたいのですか」

いつにも増して鋭い声で、返答が帰ってくる。

しかし、長い付き合いの彼女には分かっていた。

「いいえ、別に」

それが、彼女が動揺している証拠だという事に。

田邊は少し飛鳥の前を歩き始めた。

そのステップは、体格から想像できないほどに軽いものだった。

突然、軽快な電子音が鳴り響いた。

「あら、娘からだわ」

田邊が急いで持っていたハンドバッグを荒らし始める。

「もしもし？うん・・・」

彼女は、そんな田邊の後ろ姿をぼんやりと眺めながら歩いていた。

「・・・芸能人に恋するような年でもないって言うのに」

彼女は着ているジャケット襟を立て、吹き付けてくる風の冷たさに思わず首を竦めた。

頬の上のガーゼに手を置き、擦る。

昨日の殴られた痛みが、少しだけ振り返してきた。

「・・・そもそも、彼氏なんて今の私には邪魔な存在にしかならな
いわ」

「・・・で？」

酔いで赤らんだ顔で、鈴木が顔を近づけてくる。

「え？」

出鱈目な鼻歌を歌いながら、幸せな笑いではちきれそうな花岡の顔が、そこにはあった。

「『え？』 じえねえよ。」

名前も聞けて、会話も盛り上がって、3人で一緒に出口まで行ったんだろ？

それで、帰り際、メアドを交換したり会う約束をしたりしたのかって聞いてんの「

そこは花岡のマンションの部屋だった。

鈴木と花岡の二人は缶ビールとおつまみ数種類を手に、2日連続の飲み会を開催していた。

しかし、今日は昨日とは違った趣旨のものであったが。

花岡は鼻歌を止め、裂きイカを手にして、口に咥えながら呟いた。

「・・・してない」

鈴木が口に含んでいたビールを噴出しそうになり、

急いで傍に置かれていたティッシュで口を拭いた。

「お前え！この脳みそには恋愛の「れ」の字も無いのか？何で肝心な時にいつもそうなんだよっ！！」

彼が怒ってビール缶を持った手をテーブルにたたき付けた。

突然の彼の怒りに、花岡は戸惑った。

「そ、そんな。だって無理だよ。あんな状況でなんて・・・」

あまりのイラつきに、彼が自分の頭をぐしゃぐしゃ、と掻き毟る。

「ああゝ。何でお前って何時まで経っても奥手なんだよ。」

大学の時からもそうなんだもんなあ・・・。

ほら、サークルで一緒だった・・・名前忘れたけどさあ。

何とかちゃん。一つ下の。

あれだってさあ、俺が頑張って

お前の為に色々ダブルデートをセッティングしてやったりしたのに、

お前が煮え切らない態度取るから、部長に結局取られたんじゃない。

それに、この前はアイドルの・・・何とかちゃん。

名前忘れたけど。

あれだって、俺がさあ、せっかく携帯の番号とメアドを・・・」

「あーーーー！！昔の傷を掘り返すなーーーー！！」

花岡は両手で耳を抑え、顔を勢いよく横に振る。

鈴木は頂垂れたように下を向き、手を裂きイカの袋に伸ばす。

「わ、分かったよ、今度は・・・」

「いつも同じ事言ってるよなあ」

彼が新しい缶ビールの栓を開けた。

「う・・・でも、次は絶対に誘う！」

これは運命だ！

彼女と僕は、出会うべくして出会ったんだ。

だから、もし今度会った時は、絶対にご飯に・・・！！」

「もう会わずに済むって言われたんだろう？」

2枚目かつワイルドと呼ばれている男が裂きイカを口にいっぱい啜えている姿は、

あまりにも滑稽で見ものではあるが、

今の彼にとってはそれ所ではなかった。

「・・・あ、ああー！！！」

花岡は、まるでかの名画、ムンクの叫びのごとく、両手で頬を抑えながら叫んだ。

「ったく。もう駄目じゃん。

今日はせっかくのチャンスだったのに。

だからいつも女を逃すんだよ。

今日は何の為の飲み会なんだよ。

昨日は自棄酒、今日は祝杯じゃねえのか？

これじゃ、ただの反省会且つ自棄酒だつつつの」

ぐい、と先ほどふたを開けたばかりの缶ビールを飲み干して、鈴木は立ち上がった。

「悪い。今日はもう帰る。

明日午前中にロケあるんだ。お前は・・・明日は休みか」

テーブルの上で上半身を野垂れている花岡を尻目に、

彼はすっかりした足取りで玄関へと向かった。

「おい。ちゃんと戸締りしとけよ」

「・・・ふあい」

花岡の生返事に首を傾げながらも、彼は花岡の家を後にした。

1%の本音と、99%の後悔（1）

シンデレラは、はにかみながらも、王子の手を取った。

そして、ダンスフロアーへと二人は進む。

美しい音楽が、演奏者によって奏でられ始めた。

「……うるさいなあ」

ルルル、ルルル、ルルル。先ほどから家の固形電話がしきりに鳴いている。

「……ああ、分かったから！」

さすがに2日連続の飲みは拙かったようである。

頭の中で響き渡るのは、切なさではなく、2日酔いの痛み。

途中からではあるが、一人酒は酔いを次の日に持ち込むのはどうも確からしい。

「・・・はい、もしもし」

彼は布団から這い出し、ベッドの近くに置いてある子機を取った。

「・・・」

一瞬の沈黙。

「・・・もしもし？」

不機嫌さが猛スピードで加速される。

「・・・あ、もしもし・・・」

小さな声で、自信の無さげな声は、それ以上語るのを渋っているようにも思われた。

「・・・どなたです？」

後5秒して何も言ってこなければ切ろう、そう思っていた所だった。

「・・・検事の川上です。昨日はありがとうございました・・・」

眠気と酔いが一気に吹っ飛ぶ。

これは夢か、彼は自分自身に問い掛けてみる。

「・・・あ、お、おはようございます。

か、川上さんで、いらっしやいましたか。あはは・・・」

彼はベッドの上で何時の間にか正座をし、頭をぺこぺこ下げていた。

信じられない出来事が起こっている。

間違いなく、この声は昨日聞いた、彼女の声。

もう2度と会えないと思っていた、あの。

なんで気が付かなかったんだろう。

彼は心の中で先ほどの無礼を詫び続けた。

「あ、あの・・・どうされたんです？」

受話器から彼女の声が聞こえなかった為、自分から話してみた。

しかし、声が緊張の余り裏返ってしまう。

「・・・携帯電話、お忘れになられています」

「え？あ。またやっちゃったか」

「・・・また？」

「いえ、こつちの話です。そこで、どうしましょうか・・・」

「貴方の事務所の方へ送って差し上げましょうか」

「あ、いえいえ！・・・あ、そうだ。

自分で取りに参ります。

僕の不注意なのに、そちらに迷惑を掛けるわけには・・・」

願ってもないチャンスが舞い込んできた。

恋の神様はまだ、彼を見捨ててはいないようである。

「・・・着払いであれば、何も問題は・・・」

「いえいえ！手続きも煩雑ですし、それに、家も近いし、

それに僕、今日は休みなんで取りに行きますよ」

彼は慌てて彼女が言う先を制止した。

お願いだ、どうか、彼女にもう一度……。

迷っているようだが、溜息混じりに彼女が返事をした。

「……分かりました。」

但し、私は今日午前で上がりますので、正午までであれば直接お渡しできると思います。

それ以降は事務官に預からせておきますので」

「は、はい！」

彼が背筋をピン、と伸ばす。

一気に体中に回るアルコールが飛んでいく気がした。

先ほどの小さな溜息は、空耳ということだ。

「それでは、失礼します」

「失礼します」

彼は壁に向かって頭を下げた後、相手が切る音が聞こえるまで、受話器を耳に当てていた。

我に帰り、受話器を置く。

そしてベタにもほつぺたをつねってみる。

思ったとおり、痛かった。

「・・・やった！！！！あ、早く着替えなきゃ。それにシャワーも浴びて・・・」

彼は急いでパジャマを脱ぎ、一番のお気に入りの服を数枚クローゼットから取り出した。

「どれにしようかな・・・」

「・・・ふう」

受話器を置くと同時に、大きなため息が口から零れていた。

何故電話などしてしまったのだろうか。

後悔の念が彼女を襲う。

彼女は朝一番で仕事場に来ていた。

今日は本来非番であったが、

昨日の花岡の調書を完成させる必要があった為、午前中だけの勤務となっていた。

誰もいない自分の部屋の机につくと、

昨日彼が座っていた向かいの椅子の下に、携帯電話が落ちていたのを発見した。

「・・・これ、花岡さんの？」

この部屋に最後に来たのは彼だけだった。

彼女はそれを右手に持ち、後で事務官に宅配便を手配させようと思
い、

それを机の上におこうとした時だった。

『ただね、今日の花岡さんも27歳で同じ年だし、

結構ああいふ感じの人とおお似合いだなんて思っ
て』

昨日の田邊の言葉が、突然脳裏に蘇ってきたのである。

ありありと、鮮明に。

彼女は頭を横に振り、それを払拭しようとした。

しかし。

何故か、益々その言葉が気になってくるのである。

「・・・別に、私は・・・」

田邊がいる訳でもないのに、言い訳らしきものを口にしていた。

自分の手に握られた携帯電話を見る。

黒いボディに、ストラップの付いていないシンプルな折り畳み式のもの。

電源を入れると、購入時に映る初期画面が出てきた。

「・・・携帯、忘れちゃって」

よく携帯を忘れると、駅で話した時、そんな事言ってたっけ。

今時そんな人、いない。

痴漢の逮捕に協力出来るほど勇気があるのに、案外おっちょこちょいで、可愛い所もあるんだ。

心の奥に、ふわりと、暖かい何かが湧き上がる。

彼女は、肩につきそうな髪を左手で耳に掛け、携帯のディスプレイを眺めていた。

そして、気がつけば彼女は、彼の自宅の電話番号を探していたのだった。

彼の家の電話の呼び出し音が鳴っている間に、我に帰った。

いつもは慎重で冷静な行動を心がけているのに、なんて私らしくない軽率な事を。

駄目だ、こんな事は。

どうかしてる。

私は一体どうしたいの？

何を期待して、電話なんかするの？

お願い、出ないで。

そう願って電話を切ろうとした瞬間に、相手の声が聞こえた。

どうしよう。

お願い、宅配で送るよう頼んで。

そう仕向けたはずなのに。

しかし、期待は悉く打ち破られ、正午までに彼と会う約束をしてしまった。

ごめんなさい、電話は出来心なの。

ちよつと・・・多分、ただ魔が差しただけ。

だから、正午には遅れてちようだい。

3つ目の願いが叶う事を願い、彼女は携帯電話を傍に置いて仕事に取り掛かる。

そのとき、がちゃ、とドアノブをつかむ音がした。

「おはようございます、川上検事。今日はお早いですね」

がたがたがた、と突如した騒がしい音。

「・・・どうされたんですか？」

いつも早めの出勤をする田邊が、きょとんとしてドアの所で立っている。

「な、何でもありませんよ」

「・・・何を今隠されたんです？」

容姿に似合わず、鋭い洞察力を持つ彼女だった。

「・・・き、気のせいです」

動揺を隠せないどもりに田邊は苦笑しながらも、飛鳥の隣の机の上に座った。

「さ、早く調書を作成しましょう」

飛鳥はパソコンの起動音が、心臓の音を消してくれる事を切に祈っていた。

1%の本音と、99%の後悔 (2)

「川上さん」

正午8分過ぎ、ガードマンが立つ出入口を出た瞬間、

彼女の3つ目の願いは木っ端微塵に打ち碎かれた。

「・・・花岡さん」

ああ、やっぱり来ていた。

あれだけ来ないでって願ったのに。

顔だけ出して、直ぐに中に戻ってしまえば良かった。

「はい、これですよね」

飛鳥は渋々、黒い革の鞆から、黒く光るボディーの携帯を取り出し

た。

「あ、ありがとうございます」

彼女の手から携帯を受け取り、彼はそれを着ていたジャケットのポケットにしまった。

「それではこれで失礼します」

彼女は足早にその場を離れようとした、その時だった。

「あ、あの……。失礼ですが、……お昼、まだ……。ですよ
ね？」

彼の声が急いで彼女の背を追いかけて来る。

「……もし宜しければ、一緒にお昼でも……。いかがですか？」

正直な彼女にとって、理由が無い以上、絶対に拒むことが出来ない、その文句。

「・・・え、ああ、でも・・・」

嘘をつけば良い。

忙しい、これから裁判所へ行く、いくらでも断る嘘はあるのに。

こういう時に、彼女は自身の馬鹿正直さに腹を立てるのだった。

かくなる上は、彼女がとれる手段は1つ。

彼女は立ち止まり、出来る限り愛想の無い素振りを見せた。

無言によるプレッシャー。

それが、彼女なりの、精一杯の対抗手段。

「よかった。僕、良い所知ってるんですよ。この前、撮影で行った所で・・・」

しかし、彼はそんな彼女の様子を気にかける様子もなく、

いや、もしかして気が付いていないだけなのかもしれないが、

嬉しそうに彼女の隣に歩み寄る。

大きなため息が口から零れそうになったが、慌ててそれを飲み込んだ。

ああ、やっぱり止めとくべきだった。

電話さえしなければ・・・。

後悔という名の津波に飲み込まれそうになっているのに、

それなのに、どうしてこうやって彼と一緒にいるのだろう。

ここから走って逃げて帰ってしまえば良い。

そうすれば、それで終わり。

もう2度と会う事はないだろう。

そう、そうなのに。

彼女は無視しようと思っていたもう一人の自分が、こう言っているのに気が付いていた。

会えなくなるのは、嫌だ、と。

・・・何故？

完全に溺れていないのは、この手に本音という浮き輪を掴んでいるから？

だから、私は必要以上に・・・。

違う、違う、違う。

彼女は急いでその考えを打ち消すために、自らの右頬軽く2度叩いた。

「川上さん、どうされたんです？」

彼が彼女の顔を覗き込む。

「あ、何でも無いです」

彼女が慌てて答えた。

「・・・こういう風に隣に立ってみると、川上さんって、案外小柄でいらっしやるんですね」

花岡が上から見下ろすようにして言った。

「身長、152cmしかありませんから」

「え、そうなんですか？もっと高い印象でした」

彼がにこ、と笑う。

まるで太陽のような眩しい光を放つように。

彼女は思わず目を細めた。

素敵な笑顔。

感嘆のため息をつきそうになる。

そう彼女は思うと同時に、どこかでそれを怖いと感じていた。

笑顔は時に素顔を隠すからだ。

「ところで、検察官をされてどれくらいになるんですか」

「・・・今年で3年になります」

「そうですか。お仕事、大変じゃないですか」

彼にとっては、会話のつなぎでしかない質問だった。

「全く大変ではありません」

きっぱりと、彼女はそう言い放った。

突然の彼女の口調の変化に、彼は少し戸惑った。

「あ、そうですか。いや、あまり詳しくないので、

知識とか増やそうかなあ、とか思ったり・・・」

先ほどまで少しうつむき加減だった彼女が、きつと彼に顔を向けた。

そこには、さつきとは違う、真剣そのものの表情が浮かんでいる。

そしてその視線は、彼の瞳をしっかりと掴んでいた。

「検察官には、全ての刑事事件を捜査する権限、そして起訴という重大な権限を任されています。

いくら犯罪の嫌疑がかかっている被疑者、被告人であるとはいえ、

捜査をして起訴をするという事は、一歩間違えればその人の基本的
人権を侵害しかねない、

いえ、侵害行為それ自体なのです。

しかし、私達は真実発見、社会正義の実現という任務故に、

このような強大な権限を任されています。

その権限を公平、適正に行使する為には、常に慎重で、且つ自分に厳しくなければなりませんのです。

まさしく秋霜烈日。

この言葉の示さんとする意味の通りです。

仕事が大変と言うのは怠慢であることの証拠です。

そういう者に検察官と名乗る資格は無いと私は思います」

何時の間にか、彼女は肩で息をしていた。

行き交う人々は、そんな彼女を不思議そうに見ている。

彼は黙って、彼女の話聞いていた。

その時、彼の脳裏に思い出されたのは、あの日、電車で見た勇姿。

今も、その時と同じ、キラキラしている彼女がここにいる。

そして一言、呟いた。

「素晴らしいです」

いつの間にか、彼は両手でぱちぱちと拍手を送っていた。

その、「素敵」で輝くような笑顔で。

彼女はそんな彼の一言に、我に帰ったのか、

真っ赤になって耳を抑えながら下を向いて小走りを始めた。

「あ、川上さん。そちらでは……。おい」

手に滅多にかかない軽い汗をかきながら、彼は彼女の歩調に合わせた。

勇気、グラッシアス！（１）

ダンスホールに華麗に舞う二人。

煌びやかなシャンデリアの下で、楽しい時間は飛ぶように過ぎていく。

魔法が解けてしまう時間が、もうすぐ来てしまう事にも気が付かずに。

沈黙の中にやっと投下された、彼の一言。

「・・・あの、おいしいですか・・・？」

しかし、その投下されたものは、沈黙を破るだけの威力は持っていなかったようである。

しばらくして、彼女がぽつりと一言つぶやく。

「・・・ええ」

間髪いれずに、彼の安堵のため息がこぼれおちた。

「よかった・・・」

「・・・」

二人が入った所は、そう遠くない所にある、小さなカフェ仕様のイタリアンレストランだった。

周りは昼時に賑わっている。

その日も、いつものように賑わっていて、店内は騒がしい。

ただほんの一箇所を除いては。

「・・・あの・・・」

「・・・はい？」

「・・・おいしいですよね？」

「・・・ええ」

彼がスプーンとフォークを持つ両手の動きを止めた。

「ごめんなさい、僕、無理やり誘っちゃったみたいですね」

彼が済まなさそうな顔をして、俯く。

今更気がついたのか、と突っ込みたくなったが、彼女は何も答えなかった。

ただ、両手の動きを止めただけ。

「・・・はあ。僕、本当駄目な人間なんです」

大きく溜息をつきながら、水の入ったワイングラスに、彼が手を伸ばす。

しかし、一向にそれに口を付けようとしない。

ただ、右手に持って、その中の水を回している。

「・・・例えば、ある女性が気になったとするじゃないですか。

でも、いつも自分から何も言えなくて。

友人に頼ってばかり。それでも失敗するけど。

大学受験も、就職も、自分の意志を貫く事なんかなかった。

なんとなくやってみて、気がつけばそこにいるって感じで。

それはそれで不満とかはないんです。

でも、やっぱりそれだと空しいし。

しかも、それが恋愛だと、なかなか僕の場合だと通用しないみたいで。

恋愛に関してあ、何となく、が通用しない。

だから、今度こそは自分独りでやってみようと思っても……。

でも、やっぱり駄目なんです。

失敗しちゃうんじゃないかって思って自分をセーブしたり、

どこでブレーキ踏むべきなのか、分からなかったり。

本当、ダメな男ですよ、僕は。自分でやろうとすると、上手くないかないんだ。

本当、駄目ですよね……。」

彼が悲しそうな顔をして笑う。

透き通るような肌に映るその悲哀の色は、見た事の無いような美しい色をしていた。

「……何で駄目、とか言っんですか」

「……はい？」

彼女がフォークとスプーンを両脇に置いた。

近くにあったグラスにぶつかり、軽い音を立てる。

「ダメとか言つて、諦めればそこで終わりなんですよ。

どうして最後まで変わろうと頑張らないんですか？

いつ逆転できるか分からないのに、ちよつとやって駄目だったから
つて、諦めるなんて。

それはただ、貴方が勇気の無い自分に、言い訳をしているだけじゃない
んですか？」

彼の顔の悲哀が消えていく。

代わりそこには、驚嘆が映り始める。

「私は、一度こうしたい、と思つたら、実現するまで諦めません。

だから、司法試験だつて諦めなかったし、検事になることも諦めな
かった」

彼女の真つ直ぐな視線が、彼の胸を貫いた。

「・・・そう、です・・・よね」

彼の顔に笑顔が咲き始めた。

その笑顔に、心ならずも自分の視線が吸い込まれていく事を、彼女は感じていた。

「そうですよね、僕、諦めません。」

そっか。

貴女の事好きなんだから、諦める必要なんて、ないんですよね」

「・・・は？」

今度は彼女のほうに驚く番だった。

「僕、川上さんの事を諦めませんから。どうも、僕に勇気をくれて、ありがとうございます」

「・・・あの、おっしゃってる事が？」

何度も何度も彼女の臉が上下に動く。

「だから……。川上さん、僕」

咳払いを2回、彼が姿勢を正した。

「好きなんです、川上さんの事。」

だから、僕の事好きになってももらえるよう、頑張りますから」

あまりにもあっさりとした突然の言葉に、耳を疑う。

まるで金縛りにあったように、彼女はしばらくそのままの状態で動かぬまま、

彼の顔を穴の開くぐらいに見つめていた。

「あー。川上さん？」

彼女の顔の前で右手を振る。

それに気が付いたのか、やっこの事で動き始めた。

しかし、置いたナイフを持ったり置いたりするなど、

あまりにも不自然な動きではあったが。

「え？え、そ、そんな。

わ、私は、あ・・・。

わ、私、よ、用事を思い出しました。

い、行かなきゃ！！これで、し、失礼します！！」

飛鳥は急いで椅子から立ち上がり、出口に向かった。

膝に掛かっていた白いナプキンが床に落ちたが、気がついていないのか、

そのままどんどん振り向く事無く前進していく。

しかし、再びテーブルに戻ってきた。

「2000円ですよ？ランチセット。これ、私の分です！さ、さよなら！」

どん、とお札が2枚、テーブルの上に叩きつけられた。

食器が軽い衝突音を立てた。

「ちょ、ちよつと！川上さん！」

彼女が全速力で店を走り抜ける。

「あ、ありがとうございました〜」

店員の気の抜けた声が聞こえてきた。

「・・・一万円札2枚も・・・」

置かれた諭吉を手に持ち、彼女に手を振る代わりに、それらをひらひらさせていた。

勇気、グラッシアス！（２）

「~~~~~！！」

彼女は声にならない叫び声を電車のホームで上げていた。

信じられない。

あんな事を言うだなんて。

今日は最悪。

彼に、検察官について訳も分からず捲くし立て、

拳句の果てにレストランで大声を出して、そして逃げてきてしまった。

一連の失態、いつもの冷静な彼女であれば、有り得ない。

何故こんなことをしてしまったのか。

自分の未熟さ？

自分の感情・・・

違う。

断じて違う。

それも、これも、あの人が全部悪い。

私は、だって、凄く悲しそうな顔をして、無理だ、駄目だ、なんて言うから、励ましただけ。

あんな言葉は待ってなんかいなかった。

今度は大きな溜息を付いた。

扉の開いた電車に乗り込む。

ドアよりに設置された長いすの、空いていた端の席に座り込む。

瞼を閉じると、その裏に映ったのは、あの笑顔。

キラキラ星のように輝く、あの屈託のない笑顔。

あの笑顔、良くない。

あんな笑顔、もう見たくない。

絶対に。

本当に体に悪い。

あの笑顔を見ると、一瞬だけだけど、心が熱くなって、それに、苦しくなる。

隣にある手すりにもたれ掛かった。

頭と肩を、そこに委ねる。

持て余すほどの嫌悪感に、彼女は苛まされた。

知っている。

見ないふりをしている彼女自身が、今どいう「病氣」にかかりそうなのかを。

一度侵されると、そう簡単に、治らない。

彼女は頭を振り、何かを吐き出すかのように、大きくため息をついた。

これ以上思考回路を動かしたくはなかった。

動かしてはいけない気がした。

これ以上動かせば、もしかしたら、悪化してしまうかもしれない。

ずっと前に治った筈の。

「・・・ふう」

もう一度大きな溜息を口から零す。

車窓からは昼の都会の喧騒が映り出されていた。

「・・・じめん」

「・・・言うことは、それだけ？」

ひどい雨だった。

日照りが続いていた日々に、突然振り出した雨。

頭の上で開く傘に叩きつけられる音が、耳障りだった事を、覚えて
いる。

「・・・良いのよ、これで」

心とは裏腹に、次から次へと飛び出してくる言葉たち。

それは、彼を攻撃するためなのだろうか。

それとも、自分自身を守るためだったのだろうか。

「私も、貴方も。これが正解だったんじゃないかしら」

不思議と、涙は出てこない。

閉まった門の前、他に誰もいない、真っ暗な夜の中に、街灯の光だけが、彼らを包んでいた。

「本当にごめん。謝っても、謝り切れないけど・・・」

彼女は左手の薬指にしていた指輪を外し、目の前に立つ男のスーツのポケットに押し込んだ。

「もったいなかったわね、これ。彼女には・・・あげられないか、こんなもの」

口だけが、笑っていた。

雨脚が、どんどん強くなっていく。

「・・・さよなら。その人と、幸せにね。私に望めなかったもの、その人なら叶えてくれる」

彼女は一目散にその場を走り出した。

胸が苦しい。

走っているからなのか、それとも他の何かなのか。

前が良く見えなかった。

愛用の眼鏡のレンズが雨で濡れているからなのか、それとも、瞳自体が濡れているのか。

どっちでも、良かった。

どうだって、良かった。

ただ、頬は、雨と他の生温かい何かで、濡れていた。

その何かは、よく知っているもの。

気が付いてはいても、気が付いていない振りをしていたかった。

聞こえてくる筈の無い足音に、最後の期待を掛けて、駅へと向かった。

「次は、吉祥寺。お出口は・・・」

車内アナウンスで、はっと目が覚めた。

到着するまではまだ時間があつたが、思わず急いでその席を立つ。

その瞬間、ズキ、と体のどこかに痛みが走った。

体のどこが痛んだのだろう。

首が、痛かった。

変な姿勢で寝ていたせいなんだろう。

あと、もう一つ。

昔できた古傷が、心の奥で、ずっと昔から上げ続けてきた悲鳴に共鳴していた。

彼女は立ち上がり、ドアの前に立った。

ガラスに映る自分の顔が、いつもより情けなくて、弱そうで。

あの日の自分は、あの日でサヨナラしたのに。

彼女は右手で頬に張られたガーゼを少しめくった。

青紫に腫れた頬が、ガラス越しに見える。

彼女はそれを、ドアが開くまで見つめていた。

「勇哉。おはよう!」

朝7時。

撮影現場はいつものように賑やかだった。

「鈴木勇哉様」と紙が張られた控え室に向かうと、

コーヒーと煙草を嗜みながら、台本を読んでいる青年が一人、いた。

「おう、おはようさん。

・・・あれ?何か妙に元気だな。さては、あの検事と何か?」

にやり、と鈴木の方が動く。

「えへへ。まあ、ね」

彼の隣に座り込む。

「僕、変わったから」

突然の花岡の発言に、彼は吸っていた煙草の灰を落としそうになり、慌てて灰皿を手につ。

「何だよ、突然」

灰皿に灰が零れ落ちた。

それらがくゆらせる煙が、鼻の先をくすぐる。

「僕、川上さんの事、諦めないから！絶対に」

隣の部屋までに聞こえそうな大きな声で、花岡は言った。

「・・・川上・・・。ああ、あの検事さんね」

彼が灰皿をテーブルの上に置き、煙草を持っていた手を変え、銜え直す。

「・・・で、彼女の電話番号とアドレスは？」

12時を知らせる鐘が鳴った。

その瞬間、彼女は王子から離れ、突然お城の出口へと走り始める。

王子を後を追った。

しかし、彼女の姿はもう、見えなくなっていた。

唯一、彼女が履いていたガラスの靴を残して。

王子はそれを手に取ると、いとおしそうに、胸に抱いた。

「あら、電話ですね」

執務室で、電話のベルが鳴り響く。

狭い部屋の為、音量は普通の倍以上に感じられた。

「はい、こちら……。あら、どうも、先日はありがとうございました」

隣で飛び切りの愛想笑顔と営業用の声で電話対応をしている田邊を隣に、

飛鳥は仕事にいつにもまして熱心に取り掛かっていた。

いつも以上に言葉少ない彼女の様子をちらちら見ながら、田邊は電話の相手と話し続ける。

「はい、はい……。いえ、とんでもない。」

「・・・え？ああ、はい。おられますよ。少々お待ちくださいね」

田邊が電話の保留ボタンを押した。

「川上検事、お電話です」

「誰から？」

彼女は見向きもしないで答えた。

「花岡さんです」

ペンを走らせていた彼女の手が止まった。

しかし、視線はそのまま前に向かったままだった。

「・・・わ、私は今、仕事で忙しいって伝えてください」

いつも以上に声が甲高くなっている事を、田邊は聞き逃さなかった。

「その書類、何度目のチェックですか。

かれこれ1時間以上掛かっていますよ。

あとは部長に決裁貰うだけですよね」

バツの悪そうな表情が見えた。

「・・・冤罪を作り出してはいけないからよ。

チェックはしてもし過ぎることはないわ」

えへん、と咳払いが所在無く響き渡る。

「それ、被疑者が自白している案件ですよね？

それも現行犯で、目撃者も証拠も揃っているのではありませんか？」

「・・・」

ノック・アウト。

試合終了のゴングが聞こえた。

勝者は田邊に決まった。

受話器をぐい、と彼女の前に出す。

「良いじゃないですか。好きと言われた位で、そんなに拒まなくても」

田邊がにやり、と笑みを浮かべる。

「拒んでなんかないません！！私は、ただ・・・」

「はい、保留ボタン押してますからね」

田邊は彼女の胸に受話器を無理やり押し付け、保留ボタンをもう一度押した。

流れていたカルメンのメロディーが止まる。

彼女は大きくため息をつきながら、仕方なく受話器を耳に当てた。

「・・・もしもし」

「もしもし？あの・・・花岡です」

「どういったご用件で？」

被疑者を取り調べる時よりも冷たい声で、言い放った。

「先日お昼を御一緒した時、川上さん、1万円札を2枚置いていかれましたよね？」

それで、お釣りが一杯あるんですよ。

僕が貰う訳にいかないじゃないので、返したいのですが」

彼女は片手で頭を抱えた。

迂闊だった。

どうりで財布の中のお金が少ないと思ったら。

彼の言う通り。

完全に自分の不注意である。

いやいやいや、彼にも責任がある筈。

何の前触れもなく変な事を言ってくるから。

「ここに送っていただけませんか？着払いで結構ですから。もしくは振込みでも・・・」

「僕、今日、検察庁近くで撮影があるんです」

「・・・はい？」

「午後5時過ぎぐらい、終業ですよね？」

その時間に、この前の玄関の所で待ってますから。

良かった、僕も今日は夕方に撮影上がる予定なので」

「ちょ、ちよつと!!待ちなさ・・・」

受話器から聞こえるのは、単調な電子音の連続のみ。

「で?どうされるんです?」

にやけた田邊の顔が近づいてくる。

「・・・け、決裁もらってきますから」

彼女は受話器をそのまま机の上に放ったまま、足早に部屋を出た。

「まったく・・・。本当に素直じゃない子なんだから」

彼女はワードの文書を上書き保存しつつ、その背を見送っていた。

時刻は既に、6時近くなっていた。

「・・・川上さん、そろそろ上がりましょう。それは、今日中じゃなくても平気ですよ」

田邊はパソコンのスイッチを切る準備をしていた。

「お先にお帰りください。私はやる事がまだ残っていますので」

いつもは見せないような、無表情な顔だった。

「・・・川上さん」

田邊が大きく溜息を付いた。

「5時に約束されているのでしょ？」

優しく諭すように、説得を試みる。

「・・・一方的に言い渡されただけです」

正直、田邊の心の中はイラついていた。

もどかしくて仕方がない。

どうしてそうも素直になれないのか。

原因は知っている。

でも、もうそれだって「時効」にして良いはずだ。

このままじゃ、せっかく訪れている幸せのチャンスを、逃すことになってしまう。

お節介かもしれないけど、それだけは防ぎたい、と田邊は思ってい

た。

「・・・もう、良いじゃないですか。昔の事は、もう・・・」

「お疲れ様でした」

田邊の言葉の上に重なるように、飛鳥が言葉を発する。

彼女は田邊の方を見向きもせず、そのまま視線を机に向けたままだった。

「・・・分かりました。もし未だ待っているようだったら、帰るよ
うに伝えておきます」

田邊は上着を羽織り、鞆を持って、戸口に向かった。

「お先に失礼します」

彼女は軽く会釈をし、部屋を後にした。

窓の外は既に夜の闇に包まれていた。

飛鳥は蛍光灯を付けた。

眩しい位の光に一瞬、目が眩む。

「・・・大丈夫よ・・・。これだけすれば・・・。」

彼女は自分に言い聞かせるかのように独り言を呟き、仕事の続きをした。

「お疲れ様です」

夜8時を過ぎると、正門はもう閉まっている。

彼女は夜専用の裏口にいた。

「ご苦労様です」

齡60を過ぎているだろうガードマンに軽く頭を下げ、外に出た。

秋とはいえ、夜は相当冷え込んできている。

彼女はジャケットのボタンを閉め、駅に向かって歩き出した。

しかし、何かを思い出したかのように、突然ふ、とその足を止める。

「・・・どうして気になるの・・・」

何度も来た方向や近くの駅の入り口の方を繰り返し交互に見続けた
拳句、

苛立った声で独り言を言いながら、

とうとう彼女は来た方向へ向かって、再び歩き始めた。

「・・・嘘・・・」

彼女はその場で立ち止まっていた。

「あ、残業お疲れ様です。川上さん」

「あ、貴方って人は・・・」

居るはずないと思っていた。

それでも、念の為に来ただけだった。

人影が無い事を確認して、そのまま駅へと直行する筈だったのに。

しかし、そこに一人、いたのだった。

彼、花岡輝が、門近くの壁に寄りかかりながら。

夜中にもかかわらずサングラスを掛けて。

彼は彼女の姿を確認すると、小走りで近づいてきた。

そしてジャケットのポケットから封筒を取り出し、中身を確認した。

「田邊さんには、川上さんは仕事で忙しくて来られないから帰れって言われていたんですけど、

この前取調べした部屋の電気、付いてたから、待ってたんです」

彼の笑顔に、嘘はなかった。

一点の汚れも無い、無垢な笑いを、彼はその白い肌に浮かべていた。

「……貴方、何で……」

喉から絞り出されたその声は、かすれていた。

秋と言っても、寒いはずなのに。

ずっとここで、3時間近くも待っていたって言うのだろうか。

「何でって……。」

言っただじゃないですか、ここで待っているって。

それに、せっかく貴方にお会い出来る機会なんです。

みすみす逃すわけにはいきませんよ」

またあの笑顔を、彼は浮かべる。

街頭に照らされたその笑顔を見る勇氣は、彼女にはもう、残って
いなかった。

彼女は突然その封筒をひったくった。

「迷惑です！」

静かな街頭に、大声がこだました。

彼女は俯き、両手に握りこぶしを作って、喚き続ける。

「勝手に私の事好きだとか言って、勝手に私の事を待って……。

私の気持ちを確認もせず、そういう事をしないで！」

下を向いていた顔が、ぐい、と上がる。

心無しか、彼には、その瞳は濡れているように見えた。

そんな彼女を、暗いサングラスの奥に潜む瞳で見つめていた。

「私は……。

私は今そついう事に現を抜かしている暇などありません！

やっこの思いで検事になって、これからどんどん仕事していかなきやいけない。

貴方なんか付き合っている暇なんか微塵も無いんですよ。

私は貴方なんか好きじゃないんです！

貴方はただの事件の参考人でしか過ぎないんですよ。

もう、2度と私の前に現れないで下さい！！」

最後の方は、ほとんど叫びに近いようなものだった。

暗闇に、沈黙がこだまする。

しばらくの沈黙の後、彼は落ち着いた様子で、彼女に微笑みかけたように見えた。

「・・・すみません。

そんなに迷惑になっていたなんて、思いませんでした。

僕が至らぬ故に、貴女に迷惑をかけていたんですね。

申し訳ありません」

いつも以上に穏やかな声が、彼女の感情を逆なでする。

「もう2度と私の前に現れないで・・・!」

「・・・ごめんなさい。・・・それじゃあ、これで、さようならです」

彼はその場で深々とお辞儀をし、そしてその場を去って行った。

去っていく彼がうつむき加減で、一瞬振り返り、その場で会釈をした時に見えた表情は、

どこか笑っているかのようにも見えた。

彼女はしばらくその場で立ち尽くしていた。

冬の空気を纏った秋の風が、その場を吹きぬけていく。

一気に踏ん張っていた両足から力が抜けていく。

「・・・馬鹿・・・。私、本当に、最低・・・」

彼女はその場にしゃがみ込んだ。

気が付けば頬に貼ったままのシップが濡れている。

瞼が、熱を持っていた。

彼女はそれを両手で強く押さえ込むことしか、出来なかった。

雨こそ降っていないけれども。

今、ここで叫んでいたのは、数年前の自分。

彼は、彼ではないのに。

今は、過去ではないのに。

分かっている、そして、傷つけた。

いや、本当はそうじゃないのかもしれない。

本当は、あの時の彼をそこに見たのではなくて、

叫んだあの言葉は、

砕け散った勇気が叫ぶ、心の奥底に眠る正直な気持ちなのかもしれない。

恐怖。

不安。

1度得たものを、失うことへの。

腕の中に顔をうずめた。

どうしようもないくらいに、涙があふれてくる。

あの時以上に、もっと、もっと、たくさんの涙が。

泣き続けるしか、この涙は消せなかった。

テレビを消し、部屋の電気も消そうとした時だった。

携帯電話からバイブ音がする。

画面に表示された発信者の名前を確認した。

「ったく、もう寝ようとしているっていうのに」

軽く舌打ちをして、彼は携帯に出た。

「おい、今何時だと思っているんだ？」

思いつきり怖い声で、すこませようと考えていた彼だったが。

「もしもしー？勇哉あ？」

携帯電話からは、数時間前まで一緒に仕事をしていた親友の声が聞

こえてきた。

「・・・お前、何やってるんだ？明日の朝一番、お前だけのシーン、ロケがあるだろうがっ！！」

壁に掛けられた時計を見る。

短い針は既に2を指そうとしていた。

「えー？ロケなんかあったっけー？」

あはは、と高笑いがこだまするように聞こえてくる。

「お前・・・。今外だろ。それも・・・、相当酔っ払ってんな」

ち、と聞こえるように舌打ちする。

「あ~~~~。ばれちゃった??? いやあ、勇哉には隠し事できないよ
」

きゃはは、と高笑いをしているようだった。

嫌な予感がした。

花岡が笑い上戸になる時は、よほど飲んだ時以外は有り得ない。

今までがそうだった。

しかし、彼がたくさん飲むということは、あまり無かった。

ただ、辛い事があつた時を除いては。

今までもこれぐらいに飲んで酔っぱらつた時は、

彼の祖父が亡くなった時ぐらいだった気がする。

「おい、どうしたんだよ。・・・まさか、あの女検事関連か？」

しばらく沈黙が続くと、今度はまだ、あの高笑いが聞こえてきた。

「あはは〜」。

何で分かつちゃうのかなあ。

もしかしてえ、勇哉ってエスパーだったり？それとも超能力者？

バラエティの仕事増えるよ〜。やったじゃあん！ばんざーい」

大声で万歳三唱する声が聞こえる。

彼はもう一度舌を打った後、ベッドから降りて、

ソファに掛けていた、今日着ていたジーンズを手を取った。

「おい、今どこにいる？

迎えに行つてやるから。

・・・たく、何でそんなになるまで飲んでるんだよ」

携帯を顎と肩で抑えながら、彼は着替え始めた。

「・・・僕、頑張ったんだよ・・・」

少しの沈黙の後、突然、小さな声で、本当に消えそうな声で、そう、聞こえてきた。

「・・・生まれて初めて、自分で頑張ろうと思ったんだよ。

大学も、役者になったのも、全部成り行きだった。

全部成り行きで上手く行ってた。

不満なんて、もちろん1つも無い。

でもね、今回だけは、自分の手で、頑張ってたんだよ。

本当に、本当に・・・」

小さな嗚咽が聞こえる。

一瞬、鈴木は動きを止めた。

しかし、直ぐにシャツを着て、上着を羽織る。

もう1つ、彼には特徴があった。

本当に悲しい時、酔っぱらったふりをして、一生懸命ふざけようと

することがある、ということ。

素直に泣けなくて、わざとおどけるといふことを。

悲しいぐらいに、精一杯。

まさかと思うが、これは演技の方だろうか。

「分かった。話は後で一杯聞いてやる。とりあえず、今どこに
いるんだ」

「・・・勇哉の家の近くにある公園。自販機の近く・・・」

「よし。それは都合が良い・・・ん？」

電話の向こう側から、彼以外の声が聞こえてきた。

さっきまでは聞こえていなかったが、どうやら複数人の声である。

「おい、誰かと一緒にいるのか？」

返事は無い。

代わりにその複数の人間の声が聞こえてくるだけである。

「もしもし、もしもし？」

何人かの笑い声がした。

しかし、肝心な花岡の声は聞こえない。

「おい、返事しろ！」

その瞬間、何か、鈍い音が聞こえた。

それはまるで、金属が硬い物にぶつかった瞬間に出すそれに似ていた。

そして、笑い声に掻き消されそうな、小さなうめき声。

あまりの突然のことではあるが、聞こえてくる音だけで、

見えないはずの情景が見えるような錯覚に陥る。

背中に悪寒が走った。

「おい！輝！おい！」

ぶつ。ツー、ツー。

電話が無情にも切れた音。

体中の血の流れが、逆行していく。

「輝！！！！」

鈴木は鍵もかけぬまま、一目散に部屋を飛び出していた。

To be honest 正直なキモチ (1)

ガラスの靴の持ち主を探すため、ありとあらゆる手段を施しても見つからなかった。

それでも諦め切れなかった王子は、町中の女性にガラスの靴を履かせた。

そして、やっと、ある一人の女性が、その靴を履く事ができた。

しかし、その彼女は、光る宝石も、豪華なドレスも着ていない、

ボロボロのみすばらしい格好をした、女性だった。

「・・・おはようございます」

扉が恐る恐る、びっくり箱をあけるかのように、開いた。

「おはようございます」

田邊は、ちらり、と川上の方を見た。

いつもと同じ姿で、仕事机に向かっていた。

「川上さん、あの、昨日・・・」

おそろおそろ、田邊がそう言い掛けた時だった。

ドアのノックオンと共に、隣の部屋の事務官が入って来た。

「失礼します。」

先ほど、警察から連絡があって、

今朝の明け方、傷害の現行犯で逮捕された被疑者が数名送致されて

くるそうなんです。

それで、飛び入りで申し訳ありませんがその内の1人の取調べをお願いできないかと」

「分かりました。それで、いつ頃ですか？」

彼女はいつもと変わらない冷静な態度で答えた。

「そんなに時間はかかりません。

あと20分ぐらいで到着するそうです。

あ、これ、弁録と供述調書なんで」

その事務官が、田邊に手渡した。

田邊がざっと目を通す。

「はい、分かりました。ありがとうございます」

ばたん、とドアがしまった。

「現行犯なら楽勝ですね。」

要は被害者の怪我の具合ね。起訴するかどうかは。

物取りなら強盗致傷でいくけど」

まだ調書を見てはいないが、大体相場はつくものである。

彼女は椅子に腰かけ、仕事の準備に取り掛かった。

「そうですねえ。」

あら、結構傷害重いみたいですよ。

左足骨折、頭部打撲。

弁録とった段階でこれじゃあ、致死になる可能性もありうるかも・・・」

田邊が相槌を打った、その瞬間だった。

ペン回しをしていた指からペンが床に落ち、軽い衝突音を奏でた。

「川上さん！」

同時に、青ざめた表情の彼女の声が、最大のポリウム音で鼓膜を震わせる。

「な、何ですか突然。そんな大声出さなくても聞こえますから・・・」

「ここ！被害者の名前！職業！読んで！」

ばん、と彼女の机の上に調書が叩きつけられた。

彼女が指差す部分を口に出してみる。

「氏名、花岡・・・輝・・・。職業・・・はい、ゆ・・・う・・・。」

「これ、花岡さんですよ！」

ぞくつと背筋が凍る。

飛鳥の目の前の景色が、瞬時に霧の様に真っ白になっていく。

ただ、昨日の彼との残像が、頭の中で点滅しているだけだった。

「えーっと、調書によると、

今日の明け方、被疑者とその友人が公園を通りかかったところ、

自販機前に座り込んでいた花岡さんを見つけ、彼の頭や手足を金属バットで強打し、

財布や時計を取ろうとして、腕や頭に全治・・・、あれ、か、川上さん！どこへ！」

ばん！と扉が壁にぶつかる音がした。

彼女は、上着だけを手に、部屋を飛び出していた。

「か、川上さん！被疑者がもう直ぐ来ちゃうのに・・・。あ~~~~、もうー！」

田邊が隣の執務室へと向かった。

「すみません！ちょっと、急なんですけど・・・。」

先ほどの事務官を掴まえて、調書を押し付ける。

「え？」

「被害者、川上検事の友達なんです。

だから、今病院に行ってきた、ついでに証言も取ってきます」

田邊が体格からは想像出来ない様なスピードで走り出す。

「え？だって今朝ワイドショーで被害者はあの俳優の花岡だって。

現行犯だから、証言は……。ってちょ、ちょっと!」

時既に遅し。

彼女達の姿は米粒程になっていた。

To be honest 正直なキモチ (1)

「川上検事！」

病院に向かった歩道を全速力で走っていると、隣に黄色いタクシーがその車体を近付けてきた。

「乗って！病院まで送りますから」

窓からは田邊の顔が覗いていた。

彼女は足を止め、車の中に転がり込んだ。

「中央病院まで、急いでください」

田邊が運転手に念を押す。

あいよ、という声と共に、二人の体は座席に張り付いた。

「・・・大丈夫ですか？」

上下に大きく揺れる肩に、田邊が手を添える。

「私、昨日、彼に酷い事言っただの・・・」

田邊は彼女の手を両手で握った。

それは氷の様に冷たく、しっとりと湿っていた。

彼女の声は、次第に泣き声へと変わっていく。

「昨日、私が帰るまで待っていてくれていて・・・」

本当は・・・、う、嬉しかったの・・・。

でも、でも、でも・・・。

昔、あの人も、そういう風に、私を・・・。

だから、思い出して、私、迷惑だとか、そういう事を・・・」

田邊が両腕で彼女を抱きしめた。

「もう、良いんですよ、昔の事に縛られなくて。

素直でいることを、自分に許してあげてください」

田邊が優しく、飛鳥の頭を撫でた。

「田邊さん・・・。

私、本当に馬鹿だから・・・。

いつも、そう。失って、初めて・・・」

「まだ、間に合います。今回は手遅れなんかではありません」

病院の看板が、車窓から見え始めていた。

病院の入り口にはとても騒がしく、たくさんの人ばかりができていた。

彼女達が玄関前に着くと、一気に大勢の人と目を開けていられない程のフラッシュに囲まれた。

「すみません！通してください！」

目の前に突き出されるマイクやカメラを跳ねて、二人は前進を試みる。

「私達は捜査機関の者です。お願いします。通してください！」

田邊が川上を守るよう、片手で彼女の手を握りながら、人の波を掻き分ける。

「通してください！捜査機関の者ですから！」

しかし、田邊の声はシャッター音とフラッシュ音で消されていた。

二人はもみくちゃにされながら、

何とかしてそこを通り抜けると、全速力で病院の受付へと駆け寄った。

「おはようございます。今日はどういった・・・」

「花岡輝は？どこ？！今すぐ答えなさい！」

突然の飛鳥の大声に、受付の看護士の目は点と化していた。

「か、患者様との御関係は・・・」

「いいから！早く！」

どん、と両手で受付の窓口を叩く。

「す、すみません。検事、落ち着いて。」

私達、検察の者で、花岡さんの件について事情聴取するために参りました」

田邊が飛鳥の胸のピンバッジを無理やり引っ張って見せる。

「花岡様は、突き当りの個室でございますが、今は多分・・・ってお待ちください！」

飛鳥は脇見も振らずに走り出した。

途中で、川上さん、待ってください、と聞こえたような気がしたが、待っている暇はなかった。

心は1つの思いで一杯になっていた。

もう、後悔はしたくない。

そんな思いで。

ずっとずっと、車の中で祈り続けていた。

神様、ごめんなさい。

どんなに嫌われたって構わない。

それは自分が素直になれなかった罰だって受け入れるから。

だから、だからお願い。

神様、彼に一言だけ伝えさせて・・・。

彼の部屋が見えてきた。

戸口の隣に、「花岡輝」という名札があった。

「花岡さん！！お願い、死なないで！私まだ・・・」

こっちを向いて、お姫様。 (1)

彼女はドアを開けたと同時に彼女は叫んだ。

開けた瞬間、そこに、沈黙が切って落とされた。

「え、あ、・・・か、川上さん？」

視界にあるのは、二人の男性。

一人はベッドの上で座っていた。

それも上半身裸姿で。

そして一人はベッドの近くに立ち、上半身裸の方に何かを被せようとしていた。

「・・・あ、今、こいつ浴衣からTシャツに着替えようと・・・」

一瞬の静寂。

焦点の合わない視線が病室を泳ぐ。

1、2、3。

時計の秒針が、数を数えるかのように響き渡る。

「キヤーー！し、失礼しましたああ！！」

がしゃん、とドアを勢い良く閉める。

「いたあああつ」

「か、川上さん、何して……。指！挟まっていますよ。ドア開けて！早く！」

その場合は、病院史上、これまでに無いほどに騒然な雰囲気へと化していた。

しかし、王子はあの舞踏会で、既に分かっていた。

光る宝石でもなく、豪華なドレスでもなく、

彼女という存在が、美しいということ。

「私の妻になってくれませんか」

王子は、目の前のみすばらしい女性にそう、尋ねた。

「良かったですね、花岡さん、大事に至らなくて」

田邊と鈴木は、病院の庭のベンチに座って居た。

「ええ。俺が偶然あいつと電話している時に殴られたんで、直ぐに

駆けつけたんですよ。

だから、早く応急処置が出来て、何とか助かりましたよ。

10分でも遅かったら、ヤバイ事になっていたかもしれませんかね」

彼は胸ポケットから煙草を取り出しかけたが、その手を下ろした。

「・・・犯人達は酔っ払っていたようですね」

「ご存知なんですか？」

「今日、被疑者の取調べの為に、警察からの調書を読んで、この事を知ったんです」

「・・・そう、ですか」

鈴木がそっぽを向いた。

しばらく二人は何も話さず、ただ黙っていた。

「貴方に言っても意味が無い事は百も承知ですが・・・」

沈黙を破ったのは鈴木の方だった。

「あいつ、輝は良い奴です。」

珍しいですよ、今時。あんな格好だから、女にモテるのに、遊びもしない真面目過ぎる奴で。

それに、好きな人には凄く臆病で、だけど一途に彼女を想ってて・・・。

でも、酷い事を言われても、彼女の悪口を一言も言いやしない・・・。

それなのに、どうして・・・」

友達思いですね、そう前置きしてから、彼女は答えた。

「・・・ごめんなさい。」

私が言っても仕方ありませんが、少しだけ彼女を弁護させてください」

田邊が空を見上げる。

「1つだけ聞いて欲しいの」

大きな呼気が、上空へと舞い上がる。

「検事って、大変なのよ」

秋風が二人の間を通り過ぎていく。

一緒に、落ち葉が踊る音も、駆け抜けていく。

「それも女だと、余計にね。」

被疑者に馬鹿にされたり、同僚に馬鹿にされたり。

でも検事である以上女だからって、なめられちゃ困るじゃないですか」

ふう、と大きな溜息が、再び田邊の口から零れ落ちた。

「川上さんは、結構早くに司法試験に合格して、検事になった。

女性って、特に検事は中々なりにくいのよ。」

まあ、結婚とかあるから全国あちこち転勤させられる事を考えると、女性は採用され難いの。

始めの内は、それは大変だったと思うわ……。

妬みや、嘲り、散々受けたでしょうね。

でもね、それでも負けないで頑張ってきたの。

そして、そんなある日、彼女は転勤してきた若い検事と、恋に落ち、婚約までした。

でも、男は、結婚の条件として、仕事を止めるよう彼女に要求したわ。

彼女は随分悩んだようだけど、中々仕事を止めなかったの。

そしたらね、男は他に女を作って。結局、婚約は破綻になった」

再び、秋の風が通り抜ける。

「だから、極端に臆病なのよ。彼女は、恋愛するのに」

「そう、ですか。でも……」

「理解してもらえとは思ってない。

でもね、知っててあげて。

あの子も、本当は凄く良い子よ」

丸い顔に、笑いが点る。彼もそれにつられて笑った。

「コーヒーでも飲みます？」

組んでいた長い足をほぐし、彼が立ち上がる。

「ええ。ホットね。ミルクと砂糖は必須よ」

彼は右手を上げて、病院の売店へと向かった。

こっちを向いて、お姫様。(2)

「・・・川上さん？」

あのう、大丈夫ですか？

・・・まだ、指痛みます？・・・困ったなあ」

病室に二人が残されて、早10分が過ぎていた。

その間、彼女は何も言わず、ただ泣きじゃくっているだけだった。

彼は一生懸命彼女を泣き止ますため、変顔や冗談を言っ

て、
「冗談はいつも寒いと鈴木に馬鹿にされているのだが
はみた

効果は一向に現れなかった。

「・・・あの、聞いても良いですか？」

恐る恐る、彼女の顔を覗き込んだ。

彼女は答えることなく、ただ泣いている。

「どうして、ここに、来られたんですか？」

彼のその問いが終わらぬ間に、余計にわーーーーと彼女の泣き声が大きくなった。

「あ、ご、ごめんなさい！へ、変な事、聞いちゃいましたよね！」

あはは、やっぱり僕は・・・」

「駄目なんかじゃないから！」

鼻に掛かった大声が、狭い病室にこだまする。

「え？」

真っ赤に腫れた目をしながら、彼女は顔をあげた。

「私は・・・。」

まだ謝ってないじゃない。

昨日、あんなに酷い事言っというて、謝ろうと今日電話しようと思っていたのに・・・。

それなのに、傷害事件の調書で、貴方の名前・・・。

傷害致死になる可能性もあるとかって・・・。

私、後悔すると思って、嫌だ・・・。嬉しかったのに・・・。凄く・・・。」

彼女の頬を流れる涙がその動きを止め、顔が困惑に包まれていく。

「あの、仰ってる意味が良く・・・。」

「だから！本当は待っててくれて嬉しかったんです！」

ピタ、と彼女が泣き止んだ。

それと同時に、彼女の顔が赤くなっていく。

目を皿のように広げた彼が、彼女の朱に染まった顔を見つめた。

「あ、う、それは、その、つまり、どういふ事ですか・・・？」

「え、だ、だから、それは・・・」

彼女は右手で持っていた眼鏡を掛け直そうとしたが、上手く行かない。

「それは・・・？」

「それは・・・」

彼女の顔が、益々赤くなっていく。

彼の顔が、彼女との距離を縮めていく。

「そ、それは・・・。」

だから、貴方の、笑顔、とか・・・？」

あと少しで。

「笑顔・・・？」

その吐息が、肌で感じられる。

「・・・す、素敵のような気がするし。」

いや、そんな事じゃなくて。

私、心にも無い事を言って、傷つけたから、もう・・・。」

あと少しで。

「もう？」

「会えなくなったら、どうしようか、とか思ったらいてもたっても
いられなくなつて・・・」

頬が持つ熱を、肌で感じられる。

「飛鳥さん」

彼女の名を、その唇に宿す。

「一つだけ、お尋ねします」

包帯が巻かれた手で、短めの彼女の髪を梳いた。

さらに、とそれは指の間を抜けていく。

「ドレスを着て完全に綺麗にしていたシンデレラは、

何故、脆くて脱げ易いガラスの靴を履いていたんだと思いますか？」

「・・・はあ？」

「いいから、答えてください」

「え？えーつと……。魔法使いが、くれたからじゃなくて？」

突拍子で脈絡の無いの質問に、彼女が首を傾げる。

「本当の自分を、残しておく為に。」

そして王子は、それを見抜いた上で、シンデレラへの愛を確信したんですよ」

自分でも信じられないくらいのクサイ台詞を吐いたと思ったが、

吐かれた相手はもっと恥ずかしかったらしい、さっきよりも熱い体温を、頬で感じる。

「……僕、飛鳥さんの事、好きです。」

悪や自らが有する権力に対して秋霜烈日であるつと努める飛鳥さんも。

僕の事が心配で取り乱したりしている、弱い飛鳥さんも。

強がって虚勢張ったりする飛鳥さんも。全部、大好きなんです」

彼女が恥ずかしそうに俯く。

彼は彼女の顎を軽く親指と人差し指でくい、と上げた。

そつと、彼女の瞼が閉じられる。

漆黒の瞳に映るのは、本当の自分をさらけ出す、一人の女性の姿。

いとおしくてたまらないこの感情を、今度がその唇に直接伝えよう。

あと少しで。

その唇をこの唇で感じられる……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3842m/>

SERENDIPITY ~ ガラスの靴を履いたお姫様の恋物語 ~

2010年10月13日08時04分発行